

1万人調査からみた最新の方言・共通語意識 : 「 2015年全国方言意識Web調査」の報告

著者	田中 ゆかり, 林 直樹, 前田 忠彦, 相澤 正夫
雑誌名	国立国語研究所論集
号	11
ページ	117-145
発行年	2016-07
URL	http://doi.org/10.15084/00000844

1 万人調査からみた最新の方言・共通語意識

——「2015 年全国方言意識 Web 調査」の報告——

田中ゆかり^a 林 直樹^a 前田忠彦^b 相澤正夫^c

^a日本大学／国立国語研究所 共同研究員

^b統計数理研究所／国立国語研究所 共同研究員

^c国立国語研究所 時空間変異研究系

要旨

2015 年 8 月に実施した、全国に居住する 20 歳以上の男女約 1 万人から回答を得た Web 調査に基づく最新の全国方言意識調査の概要と「方言・共通語意識」項目についての報告、ならびにその結果を用いた地域類型の提案を行う。

「方言・共通語意識」項目は、「生育地に方言はあると思うか」「生育地の方言は好きか」「共通語は好きか」「ふだんの生活における共通語と方言を使う割合はどのくらいか」「ふだんの生活において共通語と方言の使い分けをしているか」「場面（相手）により生育地方言をどの程度使うか」の 6 項目である。これらについて、回答者の生育地と年代、生育地の生え抜きか否かに注目した分析を行った。その上でこの 6 項目の相互の関係から、12 の地域は大きく 7 タイプ（首都圏・北海道／東北／北関東・甲信越・東海／近畿・中国／九州／北陸・四国／沖縄）、細かく 9 タイプ（首都圏・北海道／東北／北関東・甲信越・東海／近畿・中国／九州／北陸・四国／沖縄）に分類された*。

キーワード：言語意識、方言、共通語、Web 調査、地域類型

1. 調査の目的と背景

本稿は、2015 年 8 月に実施した日本全国に居住する 20 歳以上の男女約 1 万人から回答を得た Web 調査に基づく最新の全国方言意識調査の概要と結果の報告、ならびにそれに基づく地域のタイプ分類の提案を主たる目的とする（以下、本調査を「2015 年全国方言意識 Web 調査」と呼ぶ）。

「2015 年全国方言意識 Web 調査」を企画・実施した目的は大きく二つある。

第一は、層化三段無作為抽出法により全国に居住する 16 歳以上の男女 4,190 人を対象にわれわれが 2010 年 12 月に実施した「2010 年全国方言意識調査」（有効回答者数 1,347 人、回収率 32.1%）の結果（相澤正夫 2012, 田中ゆかり 2011a, 2011b: 92–114, 2012, 田中ゆかり・前田忠彦 2012, 2013）と比較し、二つの調査間の異同を確認するためである。

二つの調査間の比較については、前回調査から今回調査までの期間が 5 年と比較的短いものであるため調査結果に大きな差異は認められないのではないか、という指摘もあるかもしれない。

* 本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト（基幹型）「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」（プロジェクトリーダー：相澤正夫）、科学研究費基盤研究（C）「ヴァーチャル方言研究の基盤形成と展開」（課題番号：15K02577, 研究代表者：田中ゆかり）の一環として行われた調査研究である。なお、本稿の一部は「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」共同研究発表会（2016 年 1 月 24 日、国立国語研究所）における「1 万人調査からみた最新の方言意識—「2015 年全国方言意識 Web 調査」の概要と報告—」（林直樹・田中ゆかり・前田忠彦）に基づく。

しかし、前回調査からの5年間に「方言」をとりまく状況は少なからず変化した。たとえば、ご当地方言ヒーローや自治体PRに「方言」を積極的に活用したネット動画が話題を呼ぶなど「方言」の社会生活への活用事例が増え、より活発化していること、東日本大震災を契機とした「方言」、とりわけ「東北方言」に対する意識の高まりが顕著になっていることなどである（東北大学方言研究センター 2012, 田中ゆかり 2014）。加えて、この間にPCからスマートフォンへといったインターネット接続デバイスや、メール・ブログなどからSNSへといったネットを通じたコミュニケーションツールに大きな変化があったことも見逃せない¹。このような社会情勢やコミュニケーションのあり方の変化は少なからず「方言・共通語意識」にも影響を与えているに違いない。

「2015年全国方言意識Web調査」は、「2010年全国方言意識調査」との比較を主眼とした調査であるため、「方言・共通語意識項目」では質問文・選択肢を原則として同じものとした。ただし、「2010年全国方言意識調査」の分析を踏まえた追加質問項目ならびに同様の趣旨ながらも質問文と選択肢の変更を施した差し替え項目もある。これらについては、調査概要において詳述する。

第二の目的は、Web調査という比較的新しい調査方法に基づく大規模データの特性を、同様の趣旨に基づく無作為抽出によった対面調査データとの比較を通じ検証しようというものである。Webを用いた質問紙調査については、インターネット利用が一般化してきた2000年代からさまざまなかたちで実施され、事例的・実験的検証も進み、その長所・短所などを含む特徴はかなり明らかになってきている（大隅昇 2002, 大隅昇・前田忠彦 2007, 2008, 荻野綱男 2004, 塩田雄大 2005, 2006, 那須昭夫 2004, 橋元良明 2004, 本多則恵 2006 など）。

大隅昇（2014）によれば、Web調査の多くは登録したい人が自由に登録し参加を継続する形式（ボランティアパネル²:非確率的パネル）であるため、その代表性にかんする信頼性に疑問が残る、非標本誤差の影響が大きく誤差発生源の特定が困難であるなどの短所があるとされる。一方、調査拒否の増加などにより対面調査が困難化する中において、短期間に大規模サンプルを回収することが可能で、かつ調査設計の自由度が比較的高いという利点をもつとされる。このような利点をもつWeb調査は、われわれ言語を研究対象とする者にとっても大きな魅力である。

それに加え、オンラインでデータ収集を行うコンピューター支援の調査方式を用いる狭義のWeb調査の中で、言語にかんする項目を取り上げた大規模調査の蓄積はまだほとんどないといつてよい³。そのような中において、Web調査による1万を超える回収サンプル数に基づく言語意

¹ スマートフォン保有率とSNSの利用が急速に増加しどちらも6割に達したこと（総務省 2015）、「スマホでコミュニケーション「LINE」型が主流に」（藤村厚夫、『日経MJ』2015年6月1日付）など。

² ボランティアパネルという名称ではあるが、回答者は調査参加の対価を期待して調査会社にモニター登録をしている人々である。

³ これまで言語や言語意識に関連する1万を超えるサンプルを回収した調査事例としてはNHK放送文化研究所編（1997）があるが、これはWeb調査ではない。同じくNHKには、言語使用と言語意識にかんする公開Web調査（坂本充 2004, 塩田雄大 2005, 2006）があるが、これは同研究所のサイト上に月替わりで質問項目をアップし、設問を入れ替えつつ実施されたもので、1項目あたりの平均的な回答者数は2,400人程度ということである（塩田雄大 2005）。同研究所による公開Web調査は、言語使用と意識にかんする調査で事例的な検証も行われており、回答者と回答の特性についての報告もなされている。Webアンケートであるという点、「2015年全国方言意識Web調査」に近いものはあるが、われわれの実施したWebアンケートの回答者は「委託会社にモニター登録しているアンケート協力者」であり、モニター登録している会社からの対

識調査データの分析をはじめ、回答者・回答傾向などそこで得たデータの特徴などを知ることが有益であろう。2010 年代後半にさしかかり、中年層以下の世代においてはかつてに比べインターネット利用者が特殊な層とはいえない状態に近づきつつあり⁴、そのような意味においても、母集団を想定した上でサンプルの代表性に配慮した無作為抽出・対面方式という伝統的な方法に基づくデータと、ボランティアパネルに基づくいわば有意抽出・Web 調査に基づくデータとを対比的に検証することにより、後者のデータ特性や有効性を知ることが、今後の言語研究における調査方法選択に際しての必要な知見をもたらすと考えている⁵。

以上のような本調査を実施する二つの大きな目的に加え、われわれが今回、Web 調査を行った背景には、大規模サンプル回収に基づく以下のような分析を行うという動機も含まれる。

同等予算規模で実施した無作為抽出・対面調査である「2010 年全国方言意識調査」では、サンプルサイズをそれほど大きくすることができないという制約があった。全体的な傾向や方言区画に準じて設定した地域ブロックごとの傾向性を分析するには十分なサンプル数であったが、地域ブロック内の回答者属性に基づく動向をつぶさにみていくには、一定数以上のサンプル数が回収された大都市圏を除くと、必ずしも十分な量とはいえず、詳細分析を断念した部分があった。この問題を解決する一つの方法として、経費負担を大幅に軽減しつつ、より大規模なサンプル回収が期待される Web 調査を積極的に採用したということである。

以下、調査概要では「2015 年全国方言意識 Web 調査」の全体像について示し、「方言・共通語意識」項目の具体的報告を行う。報告に際しては、項目ごとの全体的な傾向についてまず述べ、その後、回答者の生育地に基づく地域ブロックや年代、回答者が生育地の生え抜きか否かに注目し、分析を進める。最後にそれらを踏まえた地域ブロックの分類案を提示し、今後の課題を述べる。

2. 調査概要

調査設計ならびに調査票作成は本稿執筆メンバーが行い、実施は調査会社（マイボイスコム株式会社）に委託した。

調査方法は、Web 上に設置した調査サイトにアクセスして回答を求める Web アンケート方式を採った。委託した調査会社にモニター登録している全国の 20 歳以上の登録者に対して、われわれが設計した回収目標に従い調査会社がモニター登録者に調査回答の呼びかけを行い、回答候補者が自身の Web 環境に応じて Web アンケートが置かれたサーバーにアクセスし、回答した。回収目標数を充たしたセルから順次回答受付を打ち切った。回収目標設計については 2.2 で詳述する。

価を伴う呼びかけに応じた回答であるという回答に至るプロセスなど、相当異なる調査設計となっている。

⁴ もちろん、2010 年代半ばを過ぎた時点においても、「都市部」「男性」「20 代から 50 代」「ホワイトカラー」に日常的なインターネット利用者は多いが、それ以外の属性との差、とくに 40 代以下における利用率の男女差は顕著に縮まりつつある（内閣府大臣官房政府広報室 2007, 2015, 総務省 2015）。

⁵ 塩田雄大（2005, 2006）は、公開 Web 調査と無作為抽出対面調査を比較した検証が行われている数少ない事例である。

2.1 回収までのプロセス

調査期間は2015年8月20日～26日までの7日間。

ただし、当初設定した回収期限（8月25日）までに主として60歳以上の回収が設定目標に達しない見込みとなったことから、回収期間を1日延長した。さらに、延長期間までに設定目標に達しない見込みとなった特定のセル（沖縄在住の女性60代以上）の該当者に対して、調査期間延長に際してメールによる促しを1回行った。

2.2 標本設計

事前のサンプル回収目標数を10,000に設定した。

方言区画等を意識した現住所に基づく地域12ブロック（北海道・東北・北関東・首都圏〔埼玉・千葉・東京・神奈川〕・甲信越・北陸・東海・近畿・中国・四国・九州・沖縄）⁶別に性2層（男女）・年代5層（20代・30代・40代・50代・60代以上）の120セルに各人口比に基づき計10,689人を割り振った。各セルの割り付け数は、企画者らが平成26（2013）年住民基本台帳記載データを基に人口比率を算出し、指定した。人口に基づいた割り付けを行ったのは、本調査データにより2010年代半ばにおける方言・共通語意識に基づく日本全国の縮図を得たいということによる。

なお、指定した各セルの割り付け数に対して、約10%の余地を見込み、余地分を加算した回答者が集まった時点で、当該セルの回答受付を終了した。余地は、無効回答の除去を想定したものである。無効回答は、自由回答における不適切な入力⁷、存在しない郵便番号の回答、属性項目に矛盾があるものである。

現住所に基づく地域ブロック・性別・年代による120セルに対する具体的な回収目標の割り付け数と調査依頼メール配信数は、表1・2の通りである。

表1 割り付け数（人）

地域ブロック	20代		30代		40代		50代		60代以上	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
北海道	27	28	35	39	39	44	36	41	78	90
東北	58	51	60	56	63	65	65	66	123	147
北関東	49	42	51	50	53	50	52	48	97	106
首都圏	235	230	291	276	325	298	233	228	439	483
甲信越	32	25	34	35	45	37	39	39	77	84
北陸	16	15	21	21	26	24	22	22	41	49
東海	92	87	107	107	122	113	100	102	198	216
近畿	114	127	147	152	167	172	132	138	275	302
中国	42	42	52	48	51	54	47	52	104	116
四国	22	21	27	26	29	30	28	28	55	65
九州	75	77	88	88	87	98	90	101	168	208
沖縄	12	10	15	18	14	17	12	12	23	16
計	774	755	928	916	1,021	1,002	856	877	1,678	1,882
年代計	1,529		1,844		2,023		1,733		3,560	

⁶ 本調査における地域ブロックは、田中ゆかり（2011a, b）、田中ゆかり・前田忠彦（2012）を踏襲した。

⁷ 不適切な入力例としては、「aaaa…」など。

表2 メール配信数（人）

地域ブロック	20 代		30 代		40 代		50 代		60 代以上	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
北海道	237	201	117	161	167	146	118	139	253	261
東北	452	323	209	282	187	191	181	204	332	468
北関東	337	256	176	186	129	156	131	180	272	307
首都圏	1,356	1,450	917	1,090	807	1,092	548	631	943	1,314
甲信越	162	183	99	140	149	120	83	110	246	222
北陸	105	110	61	75	62	69	51	65	121	180
東海	433	567	333	382	292	472	241	317	468	594
近畿	726	822	463	583	431	630	337	417	656	912
中国	217	274	147	185	167	238	108	165	248	285
四国	104	140	100	97	79	110	74	89	125	191
九州	606	506	327	404	253	538	224	296	407	637
沖縄	113	67	92	160	74	119	36	42	70	71
計	4,848	4,899	3,041	3,745	2,797	3,881	2,132	2,655	4,141	5,442
年代計	9,747		6,786		6,678		4,787		9,583	

回収データのうち 624 の不正回答を除く 10,689 サンプルが有効回答データである。配信数に対する回収率は 28.4% であった。この回収率は、調査員が直接回答者のところに出向き対面で実施した質問紙調査である「2010 年全国方言意識調査」（回収率 32.1%, n=1,347 人）よりも若干低い。

現住所に基づく地域ブロック・性別・年代の各セルにおける回収率は、表 3 の通りである。年代が若くなるほど回収率が低くなる傾向が認められる。地域ブロック別の回収率は、おおむね 25% 台から 30% 台に収まるが、沖縄の回収率は著しく低い（17.7%）。

表3 回収率（%）

地域ブロック	20 代		30 代		40 代		50 代		60 代以上	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
北海道 (25.4)	11.39	13.93	29.91	24.22	23.35	30.14	30.51	29.50	30.83	34.48
東北 (26.7)	12.83	15.79	28.71	19.86	33.69	34.03	35.91	32.35	37.05	31.41
北関東 (28.1)	14.54	16.41	28.98	26.88	41.09	32.05	39.69	26.67	35.66	34.53
首都圏 (29.9)	17.33	15.86	31.73	25.32	40.27	27.29	42.52	36.13	46.55	36.76
甲信越 (29.5)	19.75	13.66	34.34	25.00	30.20	30.83	46.99	35.45	31.30	37.84
北陸 (28.6)	15.24	13.64	34.43	28.00	41.94	34.78	43.14	33.85	33.88	27.22
東海 (30.3)	21.25	15.34	32.13	28.01	41.78	23.94	41.49	32.18	42.31	36.36
近畿 (28.9)	15.70	15.45	31.75	26.07	38.75	27.30	39.17	33.09	41.92	33.11
中国 (29.9)	19.35	15.33	35.37	25.95	30.54	22.69	43.52	31.52	41.94	40.70
四国 (29.8)	21.15	15.00	27.00	26.80	36.71	27.27	37.84	31.46	44.00	34.03
九州 (25.7)	12.38	15.22	26.91	21.78	34.39	18.22	40.18	34.12	41.28	32.65
沖縄 (17.7)	10.62	14.93	16.30	11.25	18.92	14.29	33.33	28.57	32.86	22.54
計	15.97	15.41	30.52	24.46	36.50	25.82	40.15	33.03	40.52	34.58
年代計	15.69		27.17		30.29		36.20		37.15	

以下の報告においては、地域については、回答者の現住所ではなく Q8 として尋ねた生育地（15 歳までに一番長く過ごした都道府県）に基づく分析を行う。これは、本調査が生育地の「方言」にかんする設問を含むためである。そのため、有効回答 10,689 サンプルのうち、生育地を「海外」「わからない」とした 10 サンプルを除外した 10,679 を以降の分析対象とする。分析対象サンプ

ル 10,679 の生育地に基づく地域ブロック・性・年代別の人数は表 4 の通りである。

表 4 分析対象サンプルの生育地に基づく地域ブロック・性・年代別内訳（人）

地域ブロック	20 代		30 代		40 代		50 代		60 代以上		計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
北海道	26	38	45	45	46	46	41	49	106	113	555
東北	63	65	74	71	73	72	77	77	158	177	907
北関東	46	39	45	63	50	53	43	41	77	95	552
首都圏	195	179	232	216	259	245	180	188	311	350	2,355
甲信越	41	36	41	37	51	38	41	32	93	102	512
北陸	11	21	25	23	32	27	34	24	46	57	300
東海	100	89	109	111	131	117	107	109	191	198	1,262
近畿	115	124	155	156	184	182	143	149	290	301	1,799
中国	59	45	57	56	62	63	60	60	118	143	723
四国	23	25	29	33	31	38	31	36	84	77	407
九州	83	84	103	92	89	108	90	103	193	256	1,201
沖縄	11	10	12	11	12	11	9	7	10	13	106
計	773	755	927	914	1,020	1,000	856	875	1,677	1,882	10,679
年代計	1,528		1,841		2,020		1,731		3,559		

本稿では 3.2 において生育地に基づく地域ブロックレベルにおける「生え抜き」と「非生え抜き」による比較を行う。この区別には、「Q7 あなたが 15 歳までの間一番長く生活した場所は、現在のお住いと同一の都道府県ですか？」を使用した。生育地と現住所の都道府県が同じ場合は「生え抜き（以下 N 群）」、そうではない場合を「非生え抜き（NN 群）」とする。本稿における NN 群とは、生育地とは異なる都道府県に現住する回答者のことである。よって、NN 群には同一地域ブロック内の移動に留まる回答者も含まれる⁸。

回答者総数 10,679 人のうち、N 群は 6,808 人（63.8%）、NN 群は 3,871 人（36.2%）であった。

12 の生育地に基づく地域ブロックごとの N 群・NN 群の内訳は表 5 の通りである。全体に比べて目立って N 群が多いのは沖縄、NN 群がやや多いのは近畿である。

表 5 N 群と NN 群の生育地に基づく地域ブロック別内訳（上段人数，下段ブロック内 %）

	北海道	東北	北関東	首都圏	甲信越	北陸	東海	近畿	中国	四国	九州	沖縄	計
N 群	370	561	380	1,461	327	201	894	1,058	449	258	751	98	6,808
	66.7	61.9	68.8	62.0	63.9	67.0	70.8	58.8	62.1	63.4	62.5	92.5	63.8
NN 群	185	346	172	894	185	99	368	741	274	149	450	8	3,871
	33.3	38.1	31.2	38.0	36.1	33.0	29.2	41.2	37.9	36.6	37.5	7.5	36.2
計	555	907	552	2,355	512	300	1,262	1,799	723	407	1,201	106	10,679

2.3 調査項目

調査項目は、回答者属性を尋ねるフェイス項目、方言・共通語意識項目、方言イメージ、記憶

⁸ 埼玉県で生育したが、現住所が東京都というようなケースも NN 群に分類されている。NN 群には、ブロック間移動のある回答者とブロック内移動に留まる回答者という異なる層が存在していることになる。これらの比較については、比較のための十分なサンプル数を充たさない地域ブロックなども出てくるため、その詳細な検討については今後の課題としたい。

に残る方言コンテンツ、ライフスタイル項目⁹に大きく分かれる。質問のカテゴリーと質問項目は表6の通り、設問総数は21である。なお、設問とは別に、自動で取得した回答開始時刻ならびに同終了時刻データも得ている。それに基づく平均回答所要時間は27分。ただし、回答開始から終了まで10時間以上を要したサンプル(129)を除くと、平均所要時間は13分であった。回答所要時間の短さは、回答者の調査参加への障壁を下げるという利点となる可能性を示す。

表6 「2015年全国方言意識Web調査」項目概要

質問カテゴリー	質問項目
属性項目	性別、生年月日、職業、学歴、現住所、生育地
方言・共通語意識項目	生育地好悪、生育地方言有無、生育地方言好悪、生育地方言の場面別使用程度、方言と共通語の割合、方言と共通語の使い分け、共通語好悪、非生育地方言の場面別使用程度
方言イメージ	47都道府県、もしくは12地域ブロックに対しての「好き」「嫌い」「おもしろい」「かわいい」「かっこいい」「男らしい」「女らしい」「素朴」「温かい」「怖い」といった各種イメージ、方言イメージに影響を与えたメディア
記憶に残る方言コンテンツ	方言が登場するコンテンツ類、登場人物、登場人物の使用する方言
ライフスタイル項目	新規言語事象使用意識、文化活動頻度、インターネット環境、インターネットの利用時間、各種メディア利用頻度

2.4 「方言・共通語意識項目」の詳細

ここでは、「方言・共通語意識項目」から本稿で報告を行う6項目についての詳細を示す。

6項目のうち、「2010年全国方言意識調査」と同じ質問文・選択肢の設問が4項目(Q11生育地方言好悪、Q12生育地方言の場面別使用程度、Q19方言と共通語の使い分け、Q20共通語好悪)、同様趣旨ながら質問文・選択肢を変更した差し替え設問1項目(Q18方言と共通語の割合)、追加設問が1項目(Q10生育地方言有無)である。

いずれの項目においても選択肢に「わからない」を提示している点は、「2010年全国方言意識調査」と異なる。「2010年全国方言意識調査」は対面調査であったため、回答者に提示する選択肢リストには「わからない」は提示せず、リストに基づく回答がどうしても得られなかった場合のみ、「わからない」とした。しかし、「2015年全国方言意識Web調査」では、該当する選択肢をチェックする形式(ラジオボタン)のWebアンケートとして実施したため、「わからない」は最初から選択肢として示した。

質問文・選択肢などは、以下の通りである(選択肢は[]内に示す)。

[生育地方言有無:Q10]「あなたは、出身地(=15歳までに一番長く生活した場所)に「方言」があると思いますか、思いませんか。[ある, ない, わからない]

⁹ ライフスタイル項目のうち「新規言語事象使用意識」は「2012年全国聞き取りアンケート調査」における項目と重なる(田中ゆかり2013)。

〔生育地方言好悪：Q11〕「あなたは、出身地（＝15歳までに一番長く生活した場所）の「方言」のことが好きですか、嫌いですか。〔好き、どちらかというとき好き、どちらでもない、どちらかというとき嫌い、嫌い、わからない〕」

〔生育地方言の場面別使用程度：Q12〕「ここにあげる（A）～（C）の相手（（A）家族，（B）同じ出身地の友人，（C）異なる出身地の友人）に対して，出身地（＝15歳までに一番長く生活した場所）の「方言」を使うことはありますか。それぞれあてはまるものを1つずつ選んでください。〔よく使う，使うことがある，使わない，わからない〕」

〔方言と共通語の割合：Q18〕「あなたは，自分のことばをふり返ってみて，出身地（＝15歳までに一番長く生活した場所）の「方言」と「共通語」の割合がどの程度であると思いますか。〔方言のみ，どちらかというとき方言が多い，方言と共通語半々，どちらかというとき共通語が多い，共通語のみ，わからない〕」

〔方言と共通語の使い分け：Q19〕「あなたは，「方言」と「共通語」を場面によって使い分けていると思いますか，思いませんか。〔使い分けていると思う，使い分けていないと思う，わからない〕」

〔共通語好悪：Q20〕「あなたは，「共通語」のことが好きですか，嫌いですか。〔好き，どちらかというとき好き，どちらでもない，どちらかというとき嫌い，嫌い，わからない〕」

上記のうち〔方言と共通語の割合：Q18〕は，「2010年全国方言意識調査」における下記設問の質問文・選択肢を変更し，差し替えた。単に「共通語を使っているかどうか」と尋ねるよりも，共通語と方言を対比させるかたちでふだんの言語生活を振り返る形式のほうが回答者にとって回答しやすく，本調査趣旨により沿ったものになると考えたためである。

〔2010年全国方言意識調査 C7〕「あなたは，ふだんの生活において「共通語」を使っていると思いますか，思いませんか。〔使っていると思う，使っていると思わない，わからない〕」

3. 報告・分析

以下では，「2015年全国方言意識Web調査」における「方言・共通語意識」項目である Q10～Q12（A～C），Q18～Q20 の計 6 項目の分析結果についての報告を行う。

まず，項目ごとの単純集計結果を示し，続いて回答者の生育地に基づく地域ブロックや年代とのクロス集計結果の報告を行う。その際，関連する項目同士を組み合わせた分析も併せて行う。

次に，本調査は 1 万を超えるサンプル数を得ており，おおむね地域ブロック別の話者属性による比較にも耐えることを踏まえ，「方言・共通語意識」項目を検討する際にもっとも重要な要素となる N 群と NN 群の比較も行う¹⁰。

¹⁰ 以降の N 群と NN 群を対比する分析では他地域ブロックと併せて沖縄も図中に示すが，沖縄ブロックの NN 群のサンプルは 8 と少なく，N 群との対比的な分析にはあまり適さない。

以下で行うクロス集計表を用いた分析に際して、その多寡を述べる場合は、次の手続きを踏んだ。まず、 χ^2 乗検定を行い p 値が0.05未満の場合を「差がある」とみなす。クロス集計表が 2×3 以上のものであれば、さらに残差分析を行い、調整済み残差が+2以上となったセルについて「多い」と言及する。調整済み残差が-2以下の場合は「少ない」ということになるが、「多い」と裏表の関係でもあり、煩雑を避けるために「多い」セルに対する言及に統一する。併せて、以下における報告で用いる帯グラフにおいては、上記手順にて統計的に「多い」と判断されるセルの数値(%)を□で囲んで示す。折れ線グラフにおいては、「多い」セルについてのみ数値(%)を図中に示す。なお、%を示す際には、小数点第2位で四捨五入している。そのため、合算しても100%にならないこともある。

3.1 「方言・共通語意識」項目の単純集計と地域ブロック・年代とのクロス集計結果

以下では、「生育地方言有無：Q10」「生育地方言好悪：Q11」「共通語好悪：Q20」「方言と共通語の割合：Q18」「方言と共通語の使い分け：Q19」「生育方言の場面別使用程度：Q12(A～C)」の順に報告を行う。「生育地方言好悪」と「共通語好悪」、「方言と共通語の割合」と「方言と共通語の使い分け」についてはそれぞれの結果を併せた分析も行う。

3.1.1 生育地方言有無：Q10

まず、生育地方言有無について、全体の結果を図1に示す。

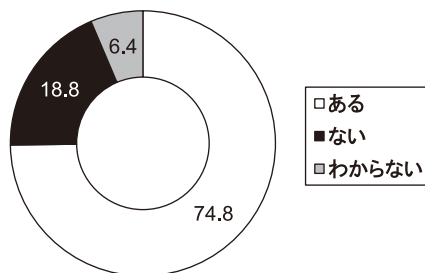


図1 生育地方言有無 (n=10,679)

生育方言は、74.8%が「ある」と回答している。「ない」は18.8%、「わからない」は6.4%である。次に、生育地に基づく地域ブロックごとに「生育方言有無：Q10」をみる(図2)。

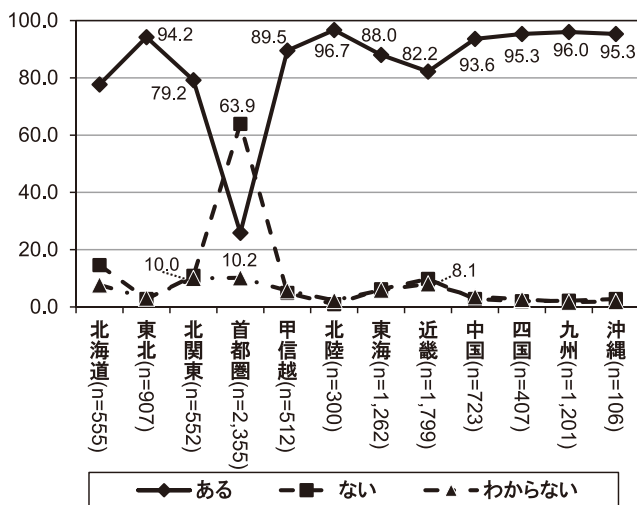


図2 生育地方言有無の地域差

「ない」が首都圏とくに多い。北海道・首都圏を除く地域ブロックでは「ある」が多い。首都圏・北関東・近畿の3地域は「わからない」が多くなっている。

3.1.2 生育地方言好悪：Q11

次に、生育地方言好悪について、全体の結果を図3に示す。

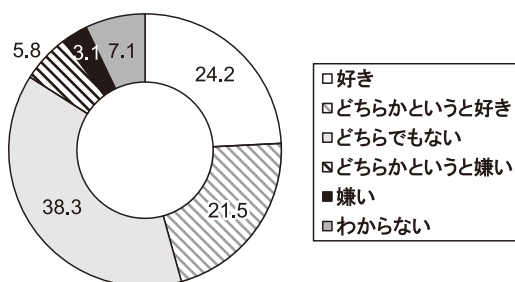


図3 生育地方言好悪 (n=10,679)

生育地方言好悪については「どちらでもない」が38.3%と最も多い。しかし、「好き」24.2%、「どちらかという好き」21.5%を合算すると、生育地方言「好き」は5割弱となり、「どちらでもない」を凌駕し最も優勢な回答となる。一方、「どちらかという嫌い」「嫌い」は合算しても10%未満、「わからない」も10%未満である。

3.1.3 共通語好悪：Q20

共通語好悪について、全体の結果を示したのが図4である。

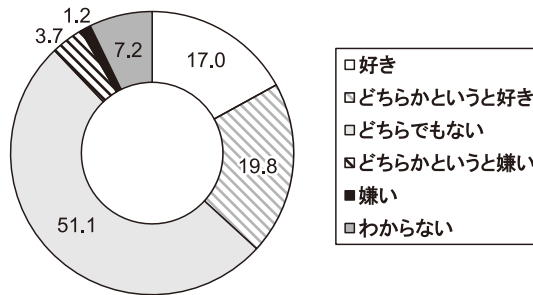


図4 共通語好悪 (n=10,679)

共通語に対する好悪は、「どちらでもない」が51.1%と半数を超え最優勢である。「好き」17.0%、「どちらかという好き」19.8%を合算しても4割に満たない。「どちらかという嫌い」「嫌い」は合算しても10%未満、「わからない」も10%未満である。

「生育方言好悪:Q11」と「共通語好悪:Q20」を併せると、生育方言は「好き」で共通語は「どちらでもない」が平均的な受けとめ方であることがわかる。生育方言・共通語ともに「嫌い」「わからない」は少ない。

3.1.4 「生育方言好き」と「共通語好き」

Q11に基づく生育方言「好き(好き+どちらかという好き)」とQ20に基づく共通語「好き(好き+どちらかという好き)」を併せた生育地に基づく地域ブロックによる違いを確認する(図5)。

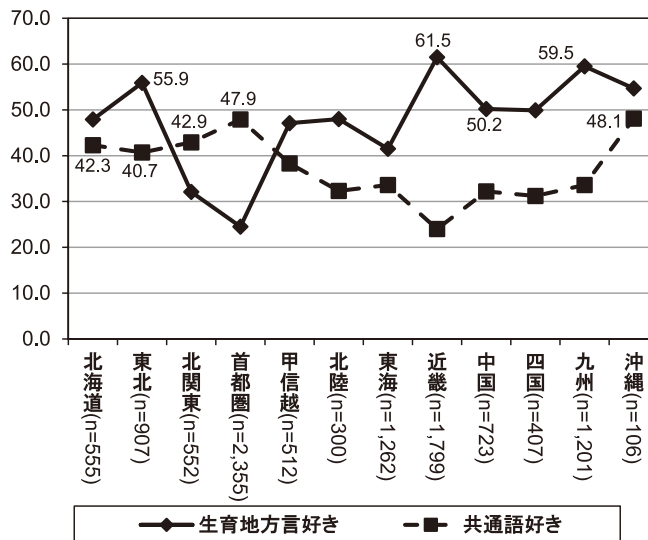


図5 生育方言と共通語「好き」の地域差

生育方言「好き(好き+どちらかという好き)」が多いのは、近畿・九州・東北・中国。共通語が「好き(好き+どちらかという好き)」は、沖縄・首都圏・北関東・北海道・東北に

多い。東北は、生育地方言・共通語どちらも「好き」が多い点が特徴的である。

3.1.5 方言と共通語の割合：Q18

ふだんの言語生活における方言と共通語の割合について、全体の結果を示したのが図6である。

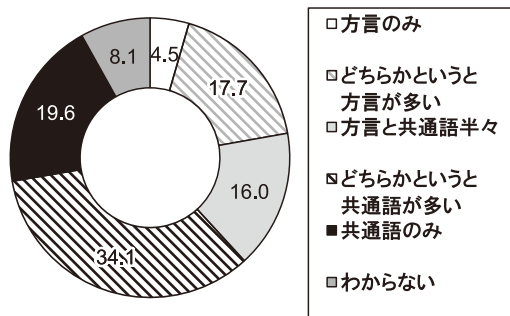


図6 方言と共通語の割合 (n=10,679)

方言と共通語の割合についての結果を見ると、「共通語のみ」19.6%、「どちらかという共通語が多い」が34.1%となり、これを合算すると過半数が共通語寄りの言語生活を送っているという意識をもつ。一方、「方言のみ」は4.5%、「どちらかという方言が多い」は17.7%で、方言寄りの言語生活と意識する層は全体の2割強である。「半々」が16.0%、「わからない」は8.1%となった。

3.1.6 方言と共通語の使い分け：Q19

方言と共通語の使い分け意識について、全体の結果を示したのが図7である。

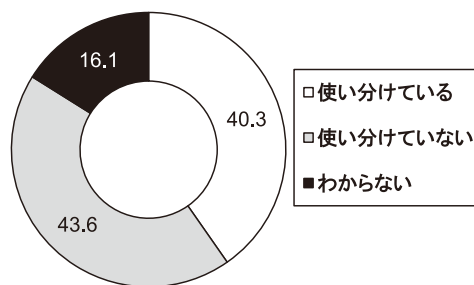


図7 方言と共通語使い分け意識 (n=10,679)

「方言と共通語の使い分け」については、「使い分けしていない」が43.6%と最も多い。ただし、「使い分けしている」も40.3%と同程度選択されており拮抗している。「わからない」は16.1%である。

「方言と共通語の使い分け」については、年代による差違も確認する(図8)。

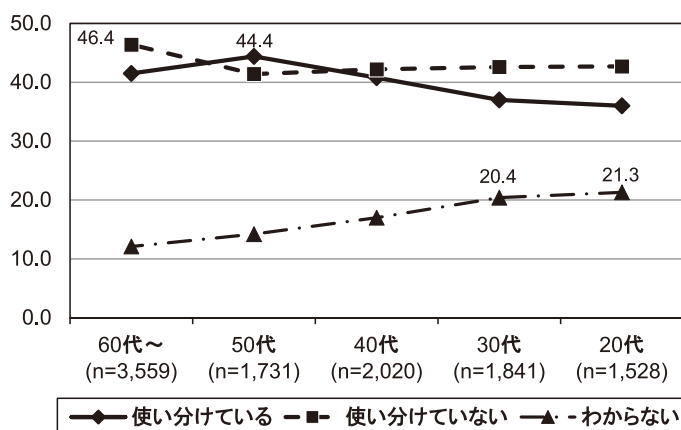


図8 方言と共通語使い分け意識の年代差

「方言と共通語の使い分け」は、若くなるほど「わからない」が増加し、最若年層の20代がもっとも多い。逆に「使い分けている」が若くなるほど減少する全体的な傾向が認められる。ただし「使い分けている」は50代がピークで、60代以上は「使い分けていない」46.4%がもっとも多い。「使い分けていない」は50代以下において40%台前半となっており、大きな変動なく推移している。

3.1.7 「共通語が多い」と「使い分けている」

次に、Q18に基づく「共通語が多い（共通語のみ＋どちらかという共通語が多い）」とQ19に基づく「（方言と共通語を）使い分けている」を併せ、生育地による差を確認する（図9）。

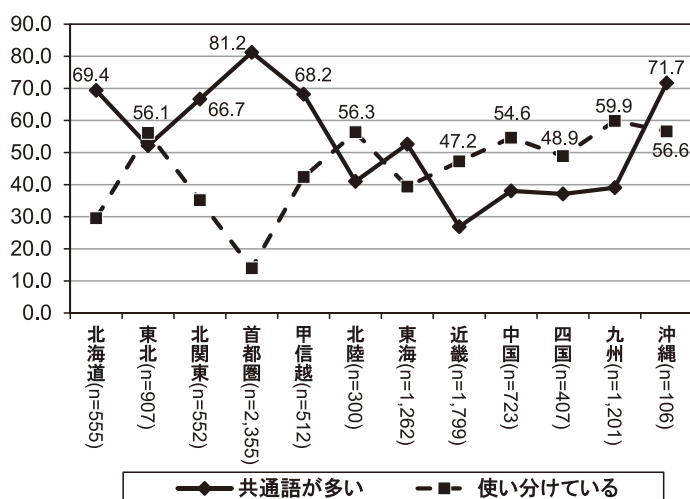


図9 共通語使用と方言と共通語使い分け意識の地域差

「共通語が多い」は、首都圏・沖縄・北海道・甲信越・北関東に、「使い分けている」は、九州・沖縄・北陸・東北・中国・四国・近畿に多い。沖縄のみ「共通語が多い」「使い分けている」ど

ちらも多く、本土他地域との違いが際立つ。

3.1.8 生育地方言の場面別使用程度：Q12 (A～C)

「生育地方言の場面別使用程度：Q12」について、「A. 家族」「B. 同じ出身地の友人（同郷友人）」「C. 異なる出身地の友人（異郷友人）」の三つの場面の結果を併せて示す（図 10）。

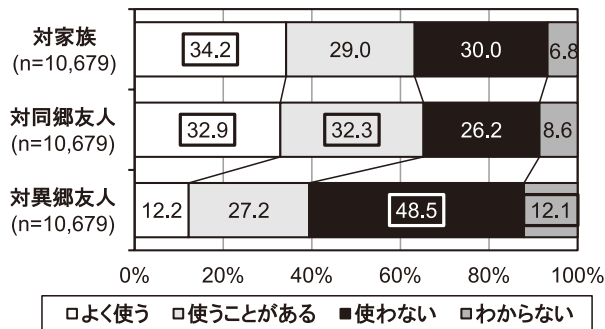


図 10 生育地方言の場面別使用程度

大まかな傾向としては、対家族・対同郷友人に対しては「よく使う」が多く、対異郷友人に対しては「使わない」「わからない」が多い。生育方言は、対家族よりも対同郷友人に対する「使う（よく使う＋使うことがある）」が多い結果になった。

次に、場面ごとに生育地に基づく地域ブロック別の結果を確認する。まず、対家族・対同郷友人の結果を示す（図 11・12）。

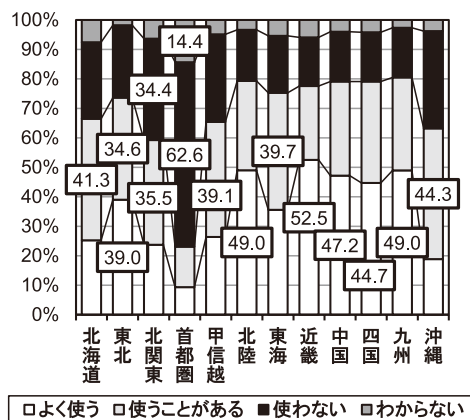


図 11 生育方言使用程度（対家族）

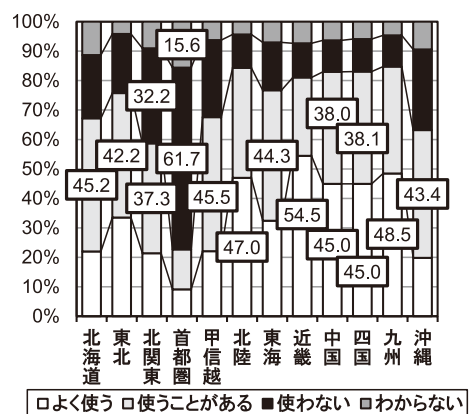


図 12 生育方言使用程度（対同郷友人）

単純集計結果と同様、対家族・対同郷友人の全体傾向は類似している。

「よく使う」が多いのは近畿・北陸・九州・中国・四国・東北、「使うことがある」が多いのは

沖縄・北海道・東海・甲信越・北関東・東北である。「使わない」が多いのは首都圏と北関東で、首都圏は「わからない」も多い。

一方、対家族と対同郷友人との間で回答傾向の異なるところも認められる。東北は対家族にのみ「よく使う」が多く、中国・四国は対同郷友人においてのみ「使うことがある」が多い。

なお、図においては、沖縄はいずれの場面においても「使わない」が多いようにみえるが、統計的に有意な値ではない。

対異郷友人の結果を示したものが、図 13 である。

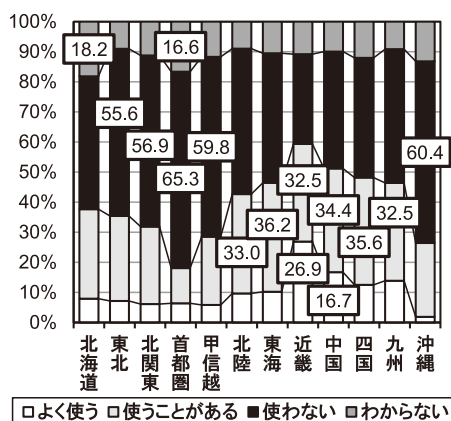


図 13 生育地方言使用程度（対異郷友人）

対異郷友人は、地域を問わず全体的に対家族・対同郷友人に比して「使わない」の比率が高い。首都圏・沖縄・甲信越・北関東・東北は、とくに「使わない」が多い。「よく使う」が多いのは近畿・中国のみ。「使うことがある」は東海・四国・中国・北陸・近畿・九州に多い。北海道・首都圏は「わからない」も多い。

3.2 「方言・共通語意識」項目における N 群・NN 群比較

以下では、「方言・共通語意識」6 項目について、回答者が生え抜き（N 群）か、非生え抜き（NN 群）かによる比較を行う。地域ブロックごとの N 群・NN 群それぞれの定義と人数、ならびに生育地に基づく地域ブロックごとの割合は表 5 に示した通りである。

3.2.1 生育地方言有無：Q10

まず、生育地方言の有無を N 群・NN 群別に比較する。結果を示したのが図 14 である。

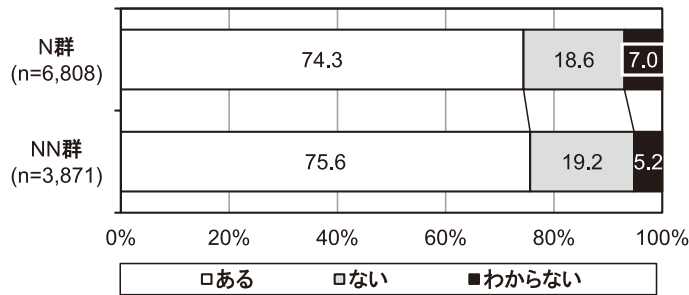


図 14 生育地方言有無 (N 群・NN 群)

「生育地方言有無:Q10」は、N 群と NN 群の回答傾向に大きな差異は認められない。N 群に「わからない」が多い程度である。N 群・NN 群別に生育地に基づく地域ブロックごとの差を確認したものが以下の図 15・16 である。

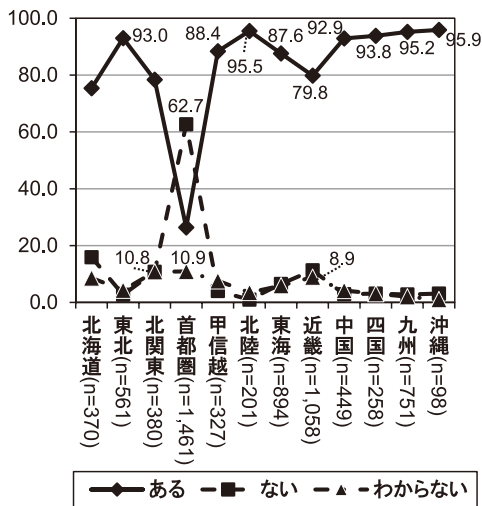


図 15 生育地方言有無の地域差 (N 群)

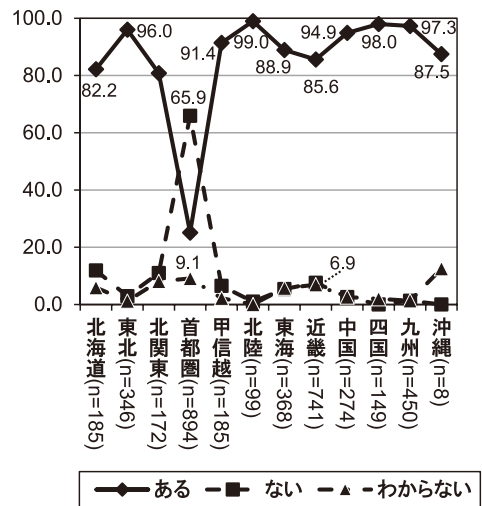


図 16 生育地方言有無の地域差 (NN 群)

N 群・NN 群どちらも首都圏にのみ「ない」が多く、その他の地域はほぼ「ある」が多いという点は、両群をまとめた全体と同じ傾向を示す。全体傾向 (図 2) と異なるのは、N 群では北関東に「わからない」、NN 群では北海道に「ある」が多い点である。

3.2.2 生育地方言好悪: Q11

次に、生育地方言の好悪を N 群・NN 群別に比較する (図 17)。

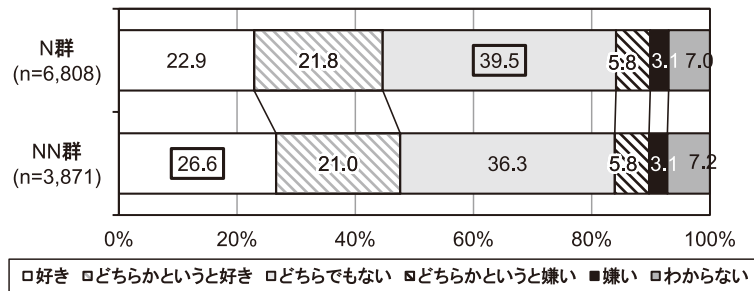


図 17 生育地方言好悪 (N 群・NN 群)

「生育地方言好悪：Q11」では、N 群に「どちらでもない」が、NN 群には「好き」が多い。

3.2.3 共通語好悪：Q20

共通語好悪の結果を N 群・NN 群別に示したのが図 18 である。

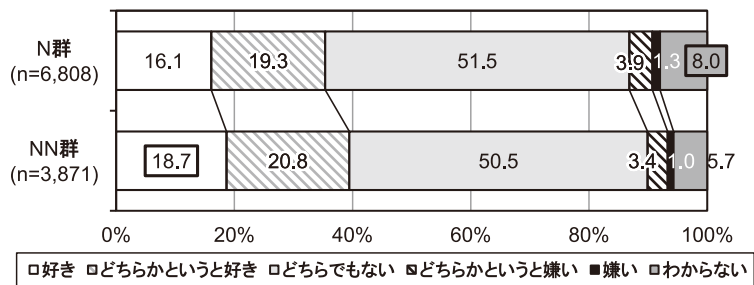


図 18 共通語好悪 (N 群・NN 群)

「共通語好悪：Q20」では、NN 群に「好き」が多く、N 群に「わからない」が多い。

3.2.4 「生育地方言好き」と「共通語好き」

Q11 に基づく生育地方言「好き（好き + どちらかという好き）」と Q20 に基づく共通語「好き（好き + どちらかという好き）」を併せ、N 群と NN 群それぞれ生育地に基づく地域ブロック別に比較したものが図 19・20 である。

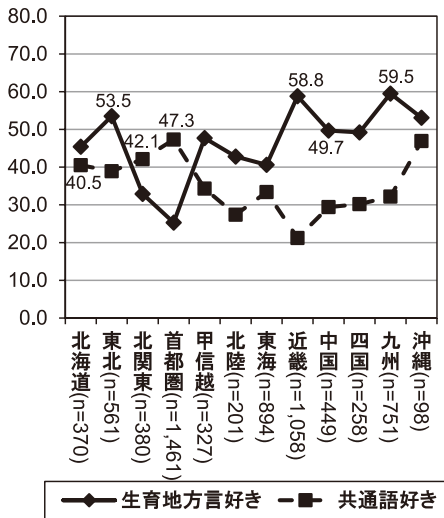


図 19 生育地方言と共通語「好き」の地域差 (N 群)

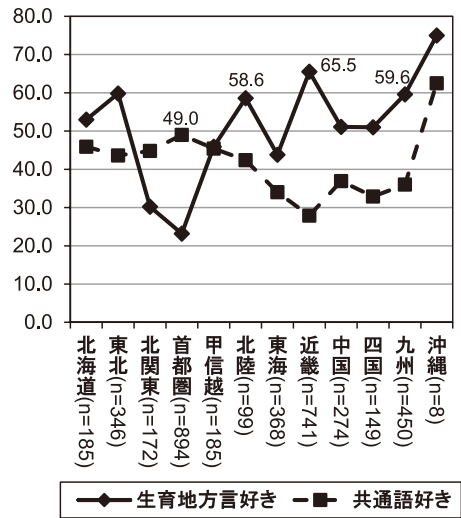


図 20 生育地方言と共通語「好き」の地域差 (NN 群)

図 19・20 を比較し、その差違に注目すると、N 群 (図 19) では東北・中国に生育地方言「好き (好き + どちらかというと好き)」, 北海道・北関東に共通語「好き (好き + どちらかというと好き)」が多く、NN 群 (図 20) では北陸に生育地方言「好き (好き + どちらかというと好き)」が多い。

3.2.5 方言と共通語の割合：Q18

ふだんの言語生活における方言と共通語の割合を N 群・NN 群別に示したのが図 21 である。

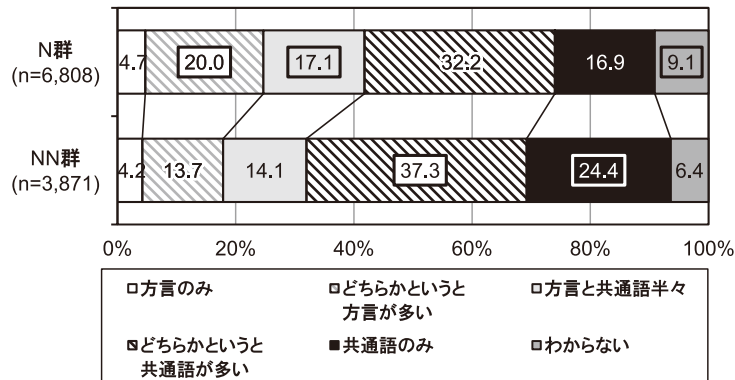


図 21 方言と共通語の割合 (N 群・NN 群)

「方言と共通語の割合：Q18」は N 群・NN 群間に顕著な違いが認められた。N 群は「どちらかというと方言が多い」「方言と共通語半々」「わからない」の回答が多く、NN 群は「どちらかというと共通語が多い」「共通語のみ」が多い。N 群は生育地方言寄り、NN 群は共通語寄りと

いう結果となった。

3.2.6 方言と共通語の使い分け：Q19

方言と共通語の使い分けを N 群・NN 群別に比較したのが図 22 である。

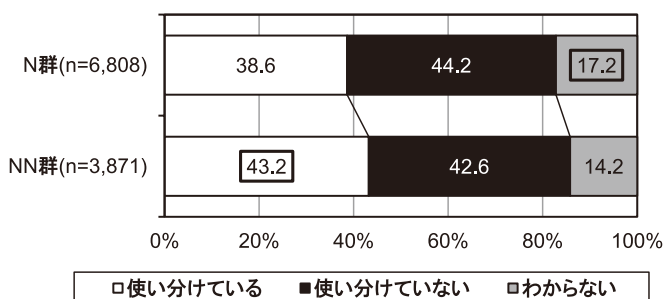


図 22 方言と共通語の使い分け (N 群・NN 群)

「方言と共通語使い分け：Q19」については、N 群が全体傾向 (図 7) と同様の「わからない」が多く「使い分けしていない」が最優勢という結果を示すのに対し、NN 群は「使い分けている」が最優勢となっており、全体傾向とは異なる。

N 群・NN 群別に年代による推移を示したものが以下の図 23・24 である。

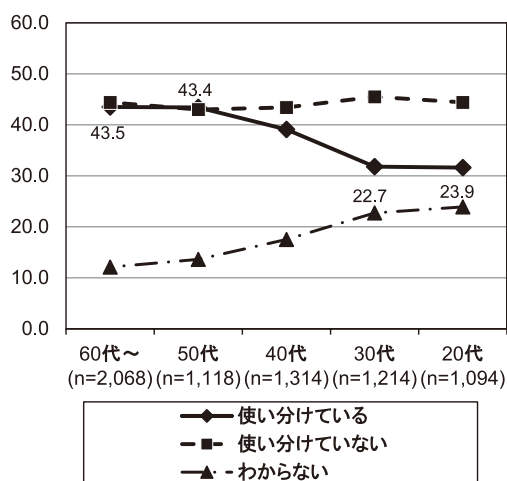


図 23 方言と共通語使い分け意識の年代差 (N 群)

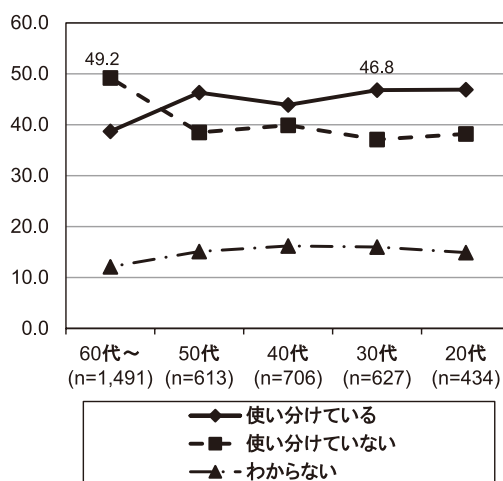


図 24 方言と共通語使い分け意識の年代差 (NN 群)

全体結果 (図 8) において認められた、若くなるほど「わからない」が増加する傾向は N 群に顕著で、ここでも 20 代・30 代に「わからない」が多い。同時に N 群では 60 代以上・50 代の高い年代に「使い分けている」が多く、若くなるほど減少する。N 群においては「方言と共通語の

使い分け」意識が「使い分けしている」から「わからない」へと推移していることが確認される。

一方、NN 群は全体とは傾向を異にする。60 代以上に「使い分けしていない」が多く、50 代以下とは異なる傾向を示す。50 代以下では相対的に「使い分けしている」が多く、どの年代もほぼ同じような比率を示しているが、ピークは 30 代である。

3.2.7 「共通語が多い」と「使い分けしている」

Q18 に基づく「共通語が多い（共通語のみ + どちらかという共通語）」と Q19 に基づく「（方言と共通語を）使い分けしている」の結果を併せ、N 群・NN 群それぞれ生育地に基づく地域ブロックごとの傾向を確認したものが、図 25・26 である。

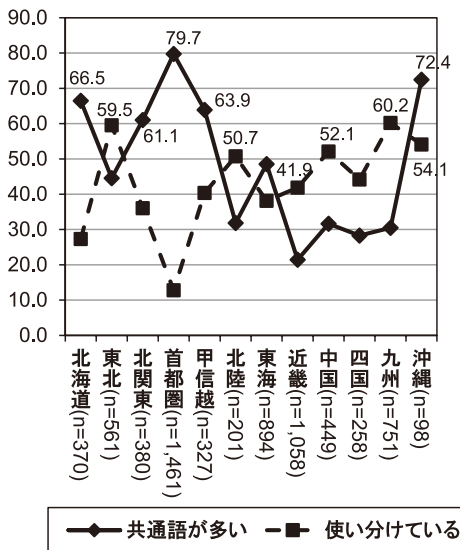


図 25 共通語使用と方言・共通語使い分け意識の地域差 (N 群)

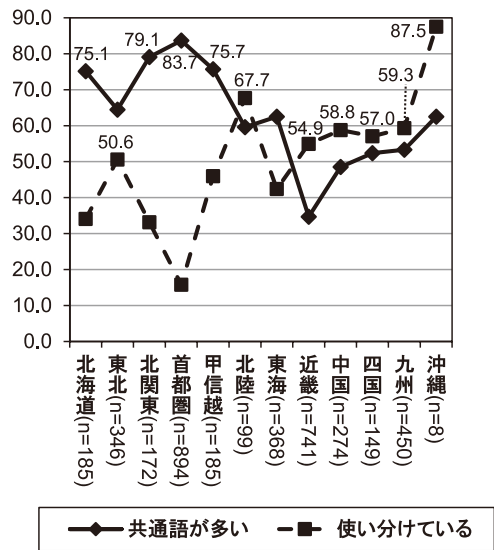


図 26 共通語使用と方言・共通語使い分け意識の地域差 (NN 群)

N 群と NN 群の図を比較すると、NN 群ではほとんどの地域において「共通語が多い」「使い分けしている」が多い。それぞれの群における地域に基づく特徴としては、N 群では沖縄に「共通語が多い」、NN 群では四国に「使い分けしている」が多いことを指摘できる。

3.2.8 生育地方言の場面別使用程度：Q12 (A～C)

生育地方言の場面別使用程度を、N 群・NN 群ごとに示したのが図 27・28 である。

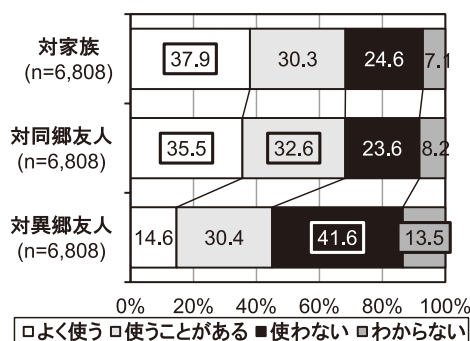


図 27 生育方言の場面別使用程度 (N 群)

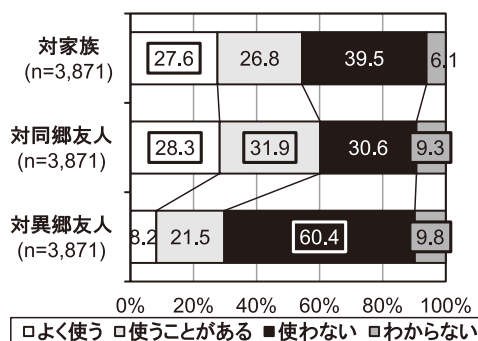


図 28 生育方言の場面別使用程度 (NN 群)

生育方言の場面別使用程度の意識については、両群を併せた全体の結果 (図 10) と同様に、対家族・対同郷友人には「使う (よく使う + 使うことがある)」が多く、対異郷友人には「使わない」または「わからない」が多い。しかし、N 群と NN 群を比較すると、N 群の方が「よく使う」「使うことがある」、NN 群の方が「使わない」の比率が高い。NN 群は対同郷友人に対して「わからない」が多く回答されている点も、両群間の相違点である。

次に、N 群・NN 群それぞれの場面別生育方言使用程度の、生育地に基づく地域ブロックによる傾向を順に確認する。

群別の対家族生育方言使用程度を地域ブロックごとに示したものが、以下の図 29・30 である。

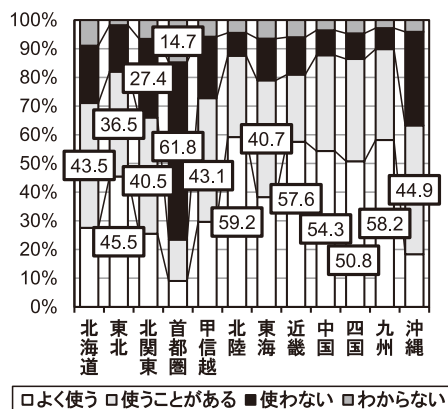


図 29 生育方言使用程度・対家族 (N 群)

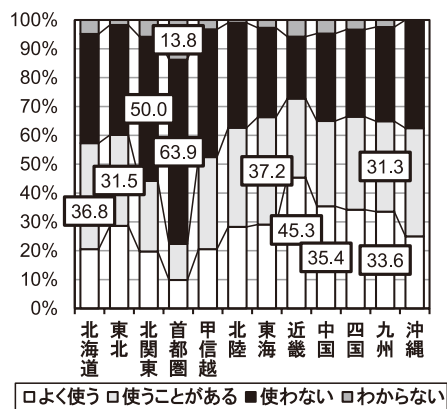


図 30 生育方言使用程度・対家族 (NN 群)

両群を比較すると、N 群に「よく使う」「使うことがある」の多い地域ブロックが目立つ。北陸・四国・東北に「よく使う」、沖縄・甲信越・北関東に「使うことがある」が多い。NN 群では、N 群において「よく使う」のみが多い九州に「使うことがある」も多くなっている。

両群の対同郷友人について生育地に基づく地域ブロックによる傾向を示したものが、以下の図

31・32である。

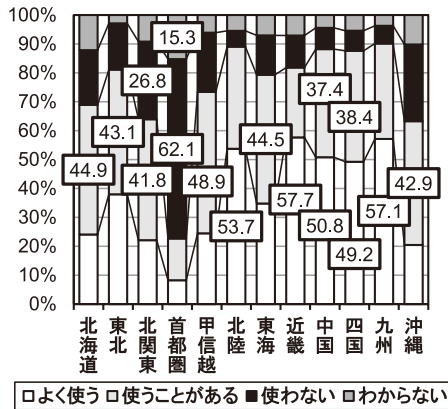


図 31 生育地方言使用程度・対同郷友人 (N 群)

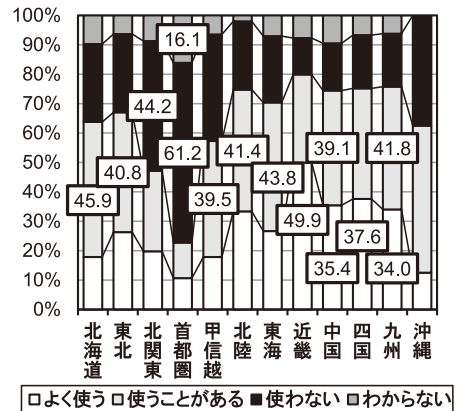


図 32 生育地方言使用程度・対同郷友人 (NN 群)

両群の差違は対家族に比して小さく、全体の結果(図 12)と類似したものとなっている。ただし、N 群の四国・沖縄・北関東に「使うことがある」が、NN 群の九州・北陸に「使うことがある」が多い点は異なる。

最後に、群別の対異郷友人生育地方言使用程度の、生育地に基づく地域ブロックによる傾向を示す結果を、図 33・34 として示す。

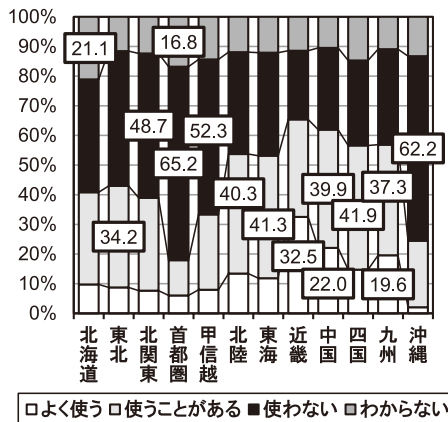


図 33 生育地方言使用程度・対異郷友人 (N 群)

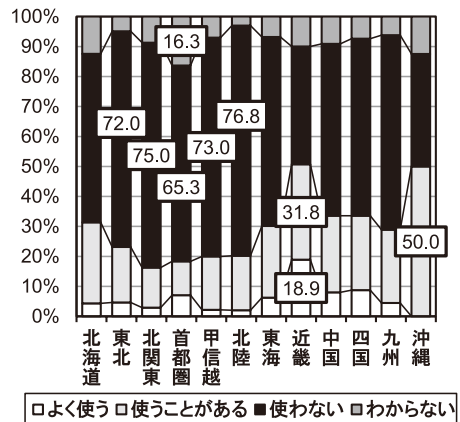


図 34 生育地方言使用程度・対異郷友人 (NN 群)

両群を比較すると、対異郷友人では、いずれの地域においても N 群に比して NN 群では「使わない」が多くなっている点をもっとも大きな違いとして指摘できる。

両群を併せた全体(図 13)と比較すると、N 群はより生育地方言を使う方向へ重点が移動していることが目立つ。東北では「使わない」から「使うことがある」へ、近畿では「使うことが

ある」「よく使う」から「よく使う」へ、九州の「使うことがある」から「使うことがある」「よく使う」へなどである。

一方、NN 群においては、全体・N 群に比して生育地方言を「使わない」の比率が顕著に高い。全体では、北陸・東海・中国・四国・九州では「使うことがある」「よく使う」が多かったが、NN 群では特徴的なセルとしてそれらは現れない。近畿 NN 群のみ全体結果と変わらず、「よく使う」「使うことがある」が多いという特徴を保つところが他地域とは異なる。近畿は、生育地である近畿を離れて居住する NN 群においても近畿方言を「使う」という意識が高いということになる。

4. まとめ

「2015 年全国方言意識 Web 調査」における「方言・共通語意識」6 項目についてまとめる。約 1 万のサンプル全体についてのまとめは、以下の通りである。

- ①生育地に方言が「ある」は約 75%。首都圏以外のすべての地域において「ある」が「ない」を上回っている (Q10)
- ②生育地方言は約 45% が「好き」。「どちらでもない」が 40% 弱 (Q11)
- ③共通語好悪は「どちらでもない」が 50% 強。「好き」は 40% 弱 (Q20)
- ④首都圏と北関東を除くすべての地域で共通語より生育地方言「好き」が多い (Q11 & Q20)
- ⑤「方言と共通語の割合」では「共通語が多い」が 50% 強。「方言が多い」は 20% 強 (Q18)
- ⑥「方言と共通語の使い分け」では「使い分けていない」「使い分けている」がそれぞれ 40% 強。年代が若いほど「わからない」が多い (Q19)
- ⑦「共通語が多い」地域は沖縄を除き「方言と共通語の使い分け意識」が低い。首都圏・北海道・甲信越・北関東がそれに該当する (Q18 & Q19)
- ⑧生育地方言の場面別使用程度では、対家族・対同郷友人に対して「使う（よく使う＋使うことがある）」が 60% 強で、首都圏以外は「使う（よく使う＋使うことがある）」が多い (Q12A・B)。一方、対異郷友人は「使わない」がもっとも多く、50% 弱。近畿・中国にのみ「使う」が多い (Q12C)

次に、「方言・共通語意識」6 項目について、回答者を生育地に居住する回答者（生え抜き：N 群）と、生育地とは異なる都道府県に居住する回答者（非生え抜き：NN 群）に分けて比較した結果のまとめを示す。

- ⑨生育地方言の有無については N 群・NN 群間に大きな違いが認められない (Q10)
- ⑩生育地方言・共通語ともに NN 群に「好き」が多い (Q11 & Q20)
- ⑪ N 群は「方言が多い」、NN 群は「共通語が多い」言語生活を送っているという意識が高い (Q18)
- ⑫ NN 群の方が「方言と共通語の使い分け」意識が高い (Q19)
- ⑬「生育地方言の場面別使用程度」については、NN 群は家族・同郷友人・異郷友人いずれの相

手に対しても「使わない」の割合が多い (Q12A ~ C)

NN 群は、生育地とは異なる都道府県において暮らす回答者である。NN 群の回答者は、共通語が「好き」で「共通語が多い」言語生活を送っていると意識しており、「方言と共通語の使い分け」意識も高い。ここで尋ねているのは回答者の生育地方言と共通語との使い分け意識であるので、生育地方言圏外に現住している NN 群にとっては当然の結果といえるだろう。NN 群は「生育地方言の場面別使用程度」においても N 群に比していずれの相手に対しても生育地方言を「使わない」が多い。これも、生育地を離れて生活していることとの関連が深いと思われる。その中で近畿 NN 群は、異郷友人にも「使う」が多く、他の地域とはふるまいが顕著に異なる。一方で、NN 群は N 群に比べて生育地方言「好き」が多い。この結果は、離れて暮らす生育地の方言に対して自身のアイデンティティや故郷へのノスタルジーを反映した結果と解釈することもできそうだ。

5. 「方言・共通語意識」からみた地域分類

「2015 全国方言意識 Web 調査」における「方言・共通語意識」の 6 項目について「生育地方言ある (Q10)」「生育地方言好き (Q11 好き + どちらかというとき好き)」「共通語好き (Q20 好き + どちらかというとき好き)」「方言を使うことが多い (Q18 方言のみ + どちらかというとき方言が多い)」「共通語を使うことが多い (Q18 共通語のみ + どちらかというとき共通語が多い)」「方言と共通語を使い分けている (Q19)」「生育地方言の場面別使用程度よく使う (Q12A ~ C)」の回答が特徴的に多い地域ブロックをマークし、一覧したものが表 7 である。

表 7 では、調整済み残差値が +2 以上を示したセルを 5% 水準、+2.6 以上を示したセルを 1% 水準、+3.3 以上を示したセルを 0.1% 水準で有意に多い回答がみられたセルとみなした。以下の表では、調整済み残差の値が +2 以上のセルに△を、+2.6 以上のセルに○を、+3.3 以上のセルに◎を付した。

表 7 2015 年全国方言意識 Web 調査「方言・共通語意識」項目：
それぞれの回答が「多い」特徴的な地域ブロック

	Q10 方言「ある」	Q11 方言「好き」	Q20 共通語「好き」	Q18 方言「多い」	Q18 共通語「多い」	Q19 使い分けている	Q12A 対家族 よく使う	Q12B 対同郷友人 よく使う	Q12C 対異郷友人 よく使う
北海道			○		○				
東北	◎	◎	◎	△		◎	○		
北関東	△		◎		◎				
首都圏			◎		◎				
甲信越	◎				◎				
北陸	◎			◎		◎	◎	◎	
東海	◎								
近畿	◎	◎		◎		◎	◎	◎	◎
中国	◎	△		◎		◎	◎	◎	◎
四国	◎			◎		◎	◎	◎	
九州	◎	◎		◎		◎	◎	◎	
沖縄	◎		△		◎	◎			

表7において特徴的なふるまいをみせるセルの類似に注目すると、12の地域ブロックは以下のような9つのタイプに分類ができそうである。分類と併せて表7から読み取れるそれぞれの言語意識上の特徴を次に示す。ここでいう方言とは生育地方言を指す。

【東日本】

《首都圏・北海道タイプ》：方言が「ある」とは思っておらず、「共通語好き」で日頃は「共通語が多い」言語生活を送る。「方言と共通語の使い分け」意識は薄く、どのような相手にも方言を「よく使う」ことはないと思っている。

《東北タイプ》：方言は「ある」と思っており、「好き」。日頃の言語生活は「方言」が多いと感じている。「方言と共通語の使い分け」意識は高い。方言は家族に対しては使うが、同郷・異郷友人には使わないと思っている。

《北関東タイプ》：方言は「ある」と思っているが、「共通語好き」で「共通語が多い」言語生活を送っていると思っている。「方言と共通語の使い分け」意識は薄く、どの相手にも方言を「よく使う」ことはないと思っている。

《甲信越タイプ》：方言が「ある」と思っているが、方言も共通語も「好き」ではなく、「共通語が多い」言語生活を送っていると思っている。「方言と共通語の使い分け」意識は薄く、どの相手にも方言を「よく使う」ことはないと思っている。

《東海タイプ》：方言は「ある」と思っているが、方言も共通語も「好き」ではなく、どちらが多い言語生活を送っているという意識も薄い。「方言と共通語の使い分け」意識も低く、どの相手に対しても方言を「よく使う」ことはないと思っている。

【西日本】

《近畿・中国タイプ》：方言が「ある」と思っており、「好き」で「方言が多い」言語生活を送っていると思っている。「方言と共通語の使い分け」意識は高く、対家族、同郷・異郷を問わず友人に方言を「よく使う」と思っている。

《北陸・四国タイプ》：方言は「ある」と思っているが、「好き」ではない。ただし「方言が多い」言語生活を送っていると思っている。「方言と共通語の使い分け」意識は高く、対家族・同郷友人には方言を「よく使う」と思っている。

《九州タイプ》：方言が「ある」と思っており、「好き」で「方言が多い」言語生活を送っていると思っている。「方言と共通語の使い分け」意識は高く、対家族・同郷友人には方言を「よく使う」と思っている。

【沖縄】

《沖縄タイプ》：方言は「ある」と思っているが、「好き」ではない。共通語「好き」で共通語の多い言語生活を送っていると感じており、かつ「方言と共通語の使い分け」意識も高い。どの相手に対しても方言を「よく使う」ことはないと思っている。

この9つのタイプをもう少し大まかに捉え直すと、以下の7タイプ程度にまで収斂させることが可能かもしれない。

【東日本】

《A. 方言が「ある」と思っているタイプ》

〈A1 東北タイプ〉：方言が「好き」で、ふだんの生活は「方言」寄りと意識している

〈A2 北関東・甲信越・東海タイプ〉：方言が「好き」ではない

《B. 方言が「ある」と思っていないタイプ》＝〈B. 首都圏・北海道タイプ〉

【西日本】

《C. 方言が「ある」と思っていて「好き」なタイプ》

〈C1 近畿・中国タイプ〉：「家族」「同郷友人」「異郷友人」すべてに方言を「よく使う」

〈C2 九州タイプ〉：「家族」「同郷友人」には方言を「よく使う」が「異郷友人」には方言を「よく使う」ことはない

《D. 方言が「ある」と思っているが「好き」ではない》＝〈D 北陸・四国タイプ〉

【沖縄】

《E. 方言は「ある」と思っているが「好き」ではなく、ふだんの言語生活を「共通語」寄りと意識しているタイプ》＝〈E 沖縄タイプ〉

6. 今後の課題

今後の課題は、同様趣旨で実施した「2010 年全国方言意識調査」との比較を行い、その共通点と相違点ならびにその要因を明らかにすることである。このことを通じ、21 世紀初頭の日本語社会における方言と共通語にかんする意識の基本的な構造と流動的な部分を抽出し、それらの背景などを追究していきたい。併せて、本調査結果が大規模調査データに基づく方言・共通語意識研究の流れ（NHK 放送文化研究所編 1997、佐藤和之・米田正人編著 1999、文化庁文化語部国語課 2001, 2011、井上史雄 2011: 123 など）にどのように位置づけられるのかも要検討事項としたい。

本稿では、5 において「2015 年全国方言意識 Web 調査」の「方言・共通語意識」にかんする 6 項目のクロス集計結果に基づく類似パターンからみた地域分類案を示した。これについては、「方言・共通語意識」6 項目を変数とする多変量解析を用いた話者タイプの抽出やそれに基づく地域類型モデルの構築など、さらなる検討を加えていく予定である。

「2015 年全国方言意識 Web 調査」に基づく九つまたは七つのタイプは、「2010 年全国方言意識調査」データを用いた潜在クラス分析結果から導き出した五つの地域類型（田中ゆかり・前田忠彦 2012）の「積極的方言話者：近畿・中国・四国」「共通語話者：首都圏・北海道」「消極的使い分け派：北関東・甲信越・北陸・東海」「積極的使い分け派：沖縄・九州・東北・中国」「判断逡巡派：その他・不明、北海道」と重なる部分も多いが、異なるところも目に付く。とくに今回の結果に基づく《沖縄タイプ》は、地元の方言に対する好感度が全般に低く、「2010 年全国方言意識調査」から得た「積極的使い分け派」¹¹ という類型とは相当に異なる。

¹¹ 「5 クラス中生育地方言好きがもっとも多い。家族・地元に対しては方言を使うが、非地元に対しては使わない。共通語が好きで使用意識も高く、使い分け意識も高い。」（田中ゆかり・前田忠彦 2012）

「2015 年全国方言意識 Web 調査」データは「2010 年全国方言意識調査」データに比してサンプル数が多い、生え抜きではない回答者を含む比率が高い、調査方法が異なる、などというさまざまな違いを含む。3.2 の報告の通り、地域ブロックの生え抜きか非生え抜きかによって異なる回答傾向を示す項目もいくつか認められた。生え抜きと非生え抜きにおいては、性別・年代・学歴・職業などの属性項目や、ライフスタイル項目における違いも大きく¹²、これらが回答傾向に影響を与えている可能性も高いと想像される。さらに、本調査における沖縄地域は、回収率が他地域に比べ目立って低かった。回収されたデータも、沖縄在住の 60 代以上女性については、当初予定していた調査期間では設定目標数に達しない見込みとなったために、調査期間を延長の上、期間中に調査回答を促すメールを追加送付したという経緯もある。このような回収率の低さと設定目標数達成に至る経緯などが回収データに影響を与えている可能性も否定できない。これらにかんする検討も今後の大きな課題である。

上述の課題は、本調査企画時のもう一つの大きな目的である、対面調査と Web 調査という調査方法の違いによる回収データと分析結果の対照研究にもつながる。これらを通じて、Web 調査のもつ可能性と限界などについての検討も行う予定である。

参考文献

- 相澤正夫 (2012) 「〈共同研究プロジェクト紹介〉多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明 方言意識の現在をとらえる—「2010 年全国方言意識調査」と統計分析—」『国語研プロジェクトレビュー』3(1): 26-37. 東京: 国立国語研究所. (<http://doi.org/10.15084/00000700>)
- 相澤正夫 (編) (2013) 『現代日本語の動態研究』東京: おうふう.
- 文化庁文化語部国語課 (2001) 『平成 12 年度国語に関する世論調査』東京: 文化庁文化語部国語課.
- 文化庁文化語部国語課 (2011) 『平成 22 年度国語に関する世論調査—現代の国語をめぐる諸問題—』東京: ぎょうせい.
- 藤村厚夫 (2015) 「スマホでコミュニケーション「LINE」型が主流に」2015 年 6 月 1 日付『日経 MJ』. 東京: 日本経済新聞社.
- 橋元良明 (2004) 「オンライン調査による社会調査の問題点」『日本語学』23(8): 180-190. 東京: 明治書院.
- 本多則恵 (2006) 「インターネット調査・モニター調査の特質—モニター型インターネット調査を活用するための課題—」『日本労働研究雑誌』551: 32-41. 東京: 労働政策研究・研修機構.
- 井上史雄 (2011) 『経済言語学論考—言語・方言・敬語の値打ち—』東京: 明治書院.
- 内閣府大臣官房政府広報室 (2007) 『インターネット上の安全確保に関する世論調査 (世論調査報告書)』東京: 内閣府大臣官房政府広報室.
- 内閣府大臣官房政府広報室 (2015) 『インターネット上の安全・安心に関する世論調査 (世論調査報告書)』東京: 内閣府大臣官房政府広報室.
- 那須昭夫 (2004) 「ウェブによる質問調査法—その方法と特徴—」『日本語学』23(8): 156-167. 東京: 明治書院.
- NHK 放送文化研究所 (編) (1997) 『現代の県民気質—全国県民意識調査—』東京: NHK 出版.
- 荻野綱男 (2004) 「電子メールによる調査方法—調査の具体的な方法とその特徴—」『日本語学』23(8): 168-179. 東京: 明治書院.
- 大隅昇 (2002) 「インターネット調査の適用可能性と限界—データ科学の視点からの考察—」『行動計量学』29(1): 20-44. 東京: 行動計量学会.
- 大隅昇 (2014) 「ウェブ調査」社会調査協会 (編) 『社会調査事典』東京: 丸善.
- 大隅昇・前田忠彦 (2007) 「インターネット調査の抱える課題—実験調査から見てきたこと— (その 1)」『日

¹² NN 群回答者は、N 群に比して、女性・60 代以上・大卒以上・無職主婦が多く、文化資本的活動をする機会が多い・メール頻度が高いという特徴を示す。

- 本世論調査協会報』100: 58-70. 東京：日本世論調査協会.
- 大隅昇・前田忠彦 (2008) 「インターネット調査の抱える課題—実験調査から見えてきたこと— (その2)」『日本世論調査協会報』101: 79-94. 東京：日本世論調査協会.
- 坂本充 (2004) 「文研ホームページ「あなたは多数派？少数派？」—「ことばアンケート」を試行して—」『放送研究と調査』54(9): 62-73. 東京：NHK 出版.
- 佐藤和之・米田正人 (編著) (1999) 『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ—』東京：大修館書店.
- 塩田雄大 (2005) 「言語変化と規範意識・使用意識—その現状把握手段としての公開型ウェブ調査の試み—」『NHK 放送文化研究所年報 2005』, 93-118. 東京：NHK 放送文化研究所.
- 塩田雄大 (2006) 「インターネット調査を用いた言語調査の一試論—公開型ウェブ調査の結果から—」『NHK 放送文化研究所年報 2006』, 93-123. 東京：NHK 放送文化研究所.
- 総務省 (2015) 『情報通信白書』東京：総務省.
- 田中ゆかり (2011a) 「言語意識による地域の類型化と分類の試み」『語文』140: 左 01- 左 16. 東京：日本大学国文学会.
- 田中ゆかり (2011b) 『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』東京：岩波書店.
- 田中ゆかり (2012) 「「方言」の受けとめかたの移り変わり—全国方言意識調査からみる年齢差・地域差—」『日本語学』31(11): 16-27. 東京：明治書院.
- 田中ゆかり (2013) 「「とびはね音調」はどのように受けとめられているか—2012 年全国聞き取りアンケート調査から—」相澤正夫 (編), 211-235.
- 田中ゆかり (2014) 「「方言」が価値をもつ時代—Stigma から Prestige, そして…—」『都市問題』105(8): 9-17. 東京：後藤・安田記念東京都市研究所.
- 田中ゆかり・前田忠彦 (2012) 「話者分類に基づく地域類型化の試み—全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討—」『国立国語研究所論集』3: 117-142. 東京：国立国語研究所. (<http://doi.org/10.15084/00000493>)
- 田中ゆかり・前田忠彦 (2013) 「方言と共通語に対する意識からみた話者の類型—地域の分類と年代による違い—」相澤正夫 (編), 194-210.
- 東北大学方言研究センター (2012) 『方言を救う, 方言で救う—3.11 被災地からの提言—』東京：ひつじ書房.

Latest Trends in Nationwide Language Consciousness of Regional Dialects and Common Language Usage in Japan: Analysis of a 2015 Web Survey of 10,000 Participants

TANAKA Yukari^a HAYASHI Naoki^a MAEDA Tadahiko^b AIZAWA Masao^c

^aNihon University / Project Collaborator, NINJAL

^bThe Institute of Statistical Mathematics / Project Collaborator, NINJAL

^cDepartment of Language Change and Variation, NINJAL

Abstract

This paper is based on a web survey conducted in August 2015. The data was collected from over ten thousand people above the age of twenty living in Japan. This paper summarizes the results of this survey, emphasizing on the most recent consciousness of regional dialects and common language usage, and proposes a regional grouping based on the analysis of the data.

The “regional dialects and common language consciousness” part of the survey included six questions: “Do you think your hometown has a dialect?” “Do you like the dialect of your hometown?” “Do you like the common language?” “Do you use both a regional dialect as well as the common language in daily life?” “What is the proportion of use of common language in your daily life, in relation to your native dialect?” “How often do you use your native dialect when speaking with someone in your family/from the same region/from elsewhere?” The results were analyzed by focusing on the subjects’ birthplace, age, and whether or not they lived in the region of their birth. The answers to the aforementioned six questions were hence grouped into seven types based on 12 regions: (1) Tokyo metropolitan area and Hokkaido; (2) northeastern Japan or the Tohoku region; (3) northern Kanto, Koshin’etsu, and Tokai (both subregions of central Japan); (4) Kinki, Chugoku; (5) Kyushu; (6) Hokuriku, Shikoku; (7) Okinawa. A more detailed regional classification of the results in nine groups is as follows: (1) Tokyo metropolitan area and Hokkaido; (2) northeastern Japan or the Tohoku region; (3) northern Kanto; (4) Koshin’etsu; (5) Tokai; (6) Kinki and Chugoku; (7) Kyushu; (8) Hokuriku and Shikoku; (9) Okinawa.

Key words: language consciousness, regional dialect, common language, web survey, regional typology